「戦争と平和！」
第 15 回

重元　帰る

佐藤 美津子

所沢市内にて、父親の白いスプリングコートを着た重元
不思議！赤い糸で結ばれていた

「宮崎重元、只今帰りました」 それは大きな声で叫び、一歩家の中に踏み込みました右手の階段の下で、軍服の袖で、そ～と涙を拭いました。父親は、やせ細って変わり果てた我が子の姿を見て、無言のまま、勝手の方に足早に行ってしまいました。そこにいた母親と共に泣いていました。

母親は息子が無事に帰るようにと、近所の弁天様にお百度参りをしていました。

或日のこと。ふと、母親の心に桜の咲く頃に帰るというお告げを感じました。

重元は小学校３年生の時、担任が授業が終わると、学校の裏山に登って、軍歌や航空隊の歌を大声でよく歌わされ、この頃から、空に対するあこがれが日増しに募っていきました。

16 歳の時、親の印を盗んで入隊希望を出しました。数日後、ポストには一枚の入隊許可葉書が入っていました。待ちに待った物が届いて大喜びしたそうです。

待望の浜松飛行場に入隊して、訓練を受けました。その後、極寒の地チチハル 24 飛行隊に配属になり満州に行きました。

昭和 20 年 8 月終戦を境に、状況は一転し、兵隊はすべて捕虜となりました。冬はぬれタオルが瞬時に棒のようになるような地で、食べ物は無く、ボロボロの服で重労働を強いられ、飢えと寒さで死んでいく人も居ました。最後は「おっかさん」と一言言って倒れたそうです。

以下はその当時のことを記した主人の一文「思いやりの心」を転載いたします。

「私がこの苦境の中にあって、辛うじて生命をつなぐことができたのは、中国人の少年に助けられたからです。その名は「孫同春」といい、この少年が乞食の姿に変装して、看守の目をごまかしては、捕虜収容所の中に入ってきて、何回もお米や卵などを届けてくれました。なぜ、この少年が私にこのような恵みを与えてくれたのか。原因となった事は、まことにささいなものでした。それは、私が、中国三十里堡という基地で、飛行訓練を実践していた時、基地の外れで、二才ほどの女の子が泣いていたので、ポケットにあった航空用キャラメルとチョコレートを与えて慰めてやった事です。私は、この事についてすっかり忘れていました。しかし、この親切、思いやりが、中国人家族の心を打ち、しばらくの間語りあわれていたというのです。数か月後、期せずして同じ地でソ連軍の捕虜となったのですが、慰めてやった一寸した親切がその家の少年の手を通して、私の命をつなぐほどの大きな形となって返ってきたのです。父の教えでもある『思えば、思われる』の教えは、異国の地にあっても見事に効果を現したのです。この思いやりの行為は、なんらかの見返りをもとめようとしてやったのでは、意味がなく、思いやること自体に自分の喜びを覚えるように自然な形でやらなければならないことを、いく度かの体験を通して悟りました。さらに悟ったことは、相手のことを悪く思ったり、憎んだりしていると、言葉や行動で現さなくても相手にいやな気持が自然に伝わるということです。禅の『以心伝心』とは、このことだと思います。」（佐藤重元追憶集より）

おとこ命の純情は
燃えて輝く金の星・・・
航空隊時代の重元

やがて、重元は、日本へ帰る日が来ました。昭和 22 年 3 月 25 日大連を出発し、桜の咲く頃、3 月 30 日博多港に上陸、やっと懐かしい祖国、我が家に帰ることができたそうです。その後、昭和 30 年に、私は重元と結婚しましたが、たいへん思いやりがあり、優しい人でした。まさに「思えば、思われる」を共に実践してきた人生だと思っています。